

## 報と情：ひととひとの間

## Space between Knowledge and Information

村主 朋 英\*

Tomohide MURANUSHI

## 要 旨

本稿は、情報学と個人との関係再構築を図る過程の一部である。情報学にとって最も中核となる要因は思考する自我であると見なした上でそれを「ひと」と呼びかえ、ことば（情報・知識）がひとを取り巻いていると見なす考えを基盤に置く。これまでに達成したのは、自己の知識を相対化してその支配を抜けるための解であった。それによって、他者の世界志向を推定し、対立の連鎖から離脱する素地を得ることができる。その一方で、自己の知識はそれら工程の基盤でもあり、そこに踏み立ってこそひとびとの織り成す宇宙を推量することができる。しかしそれだけでは他者の世界を実測することはできない。そこで本稿では、むしろ、それによって純化した「こと」(現象)を見ることができるという着想を手掛かりに論考を進めた。本稿で得られた成果は、まず、ことの領域は、ひとに帯同し、ひとを内包する「身」(運動単位)の偏り・傾き(特質)が相互に波及して形成される干渉縞だという解である。次に、その様相は異なる傾きの混淆・交錯であるが、ことばの領域と違い相剋(矛盾)はなく、矛盾はひとの身によって世界が隔絶・保全されることによって生ずるとの解を得た。

キーワード：情報学の基礎 情報学的コスモロジー

## 1. はじめに

## 1.1 みちびき

海が大地を覆いはじめた。水面に全天が映る。彩に満ちた景観だが、星雲の間は漆黒である。

一角の星がやおら光量を増した。いつとき強く輝いて、ふっと姿を消す。そのとき天幕がほころび(あれは暁の明星だったのだ)日が顕れた。

朝の国が広がる。しらけた大気のかなたに高い熱量の行き交うその情景に、地表の凍土も流水も解け全球に暖流がわたるように思われた。実のところそのようなことはなかったが、虚構とも思われぬその熱源の燦下、海の及ばぬ大陸に、ひとの営みがある。その了解があれば十分だろう。道が見えてきた。

## 1.2 来し方

本稿は、情報学と人間との関係再構築を目的とする一連の論稿(村主, 2010, 村主, 2011, 村主, 2012, 村主, 2013, 村主, 2014)を継ぐものである。

第一論稿(村主, 2010)では、情報学を捉えるための基本要因を「ひと」と「ことば」のふたつであると規定した。第二論稿(村主, 2011)では、ひとを取り巻くことばの総体を「混沌」と見なす解を描いた。第三論

\* 愛知淑徳大学人間情報学部 muransky @ asu.aasa.ac.jp

稿ではひとの直面する世界を「矛盾」という語の借用によって記述した。第四論稿では、「ひとは凝っている」と呼ぶ用語法を導入し、「自我が世界の変化を許容しない状態」およびそれによってひとがしばしば思考を制約されるという事態を記述した。

この「凝り」とは、言わばことばに関わる病である。ことばが病原に関わるということは、ことばを唯一の道具としてことばと相対するこの一連の論稿においては、死に至る病である。しかし思考する自らが麻痺し、凝っていることに気づかないことも多いようで、根絶が困難である。そこで第四論稿では、凝りを廃絶しようと図るのではなく、凝るのは思考する自我の自然であると見なし、凝りに対する留意を保ちながら「観察」(探求)を続けるという方針を提案して結んだ。

対し直近の第五論稿(村主, 2014)では、凝りがことばの偏りを助長または保全するという点に着目し、ひとが凝ることによって生ずることばの特性(偏り・傾き)がひと(思考する自我)の存立基盤を用意する、つまり、ひとの世界は凝りの介在によって維持されるという解へと至った。第二論稿で考究した「混沌(ことばの総体)」の展開において凝りがポジティブに寄与していると考えられる。また、混沌は凝りによって構成されるひとの世界の集合と見なすことができる。

この像はある種の世界観だが、ひとの世界(ひとの帯同することばの塊が体現する世界観)の複合を併せ見るような(超越的な)世界観であることから、宇宙観と呼び分けることができる。

第五論稿では、そのような宇宙観の構築において、情報学が貢献しようという解を措いた。ひとつの学術領域である以上は情報学も固有の対象・観点・方法および慣習・因襲によって強い偏りを持つが、それらの特性がむしろ他の諸領域を包越する機構につながるものと期待したのである。とくに、図書館学(librarianshipとしての)がその起源のひとつであり、それゆえ図書館員(他者の情報ニーズと向き合う一方、資料の蓄積・組織化に留意する職能)の視点が情報学にも継承されているという観測が背景にある。

第五論稿の帰結は、情報学が「世界観の饗宴」と呼ぶべき様相を示すという解に伴って得られた。しかしそれは、ひととことばの宇宙を遠望した像であり、ひとの作用ないし関与に関する記述を欠いていた。その点が課題である。

### 1.3 行き方

本稿では、前稿と同様、第一論稿から引き続くことばの操作の傾きが指し示す先を目的とする。また、概念の形成・整形のもたらす解の追求を論考の方法とする点も同様である。

第一論稿では、既成の用語(とくに学術用語)と異なる分けまめを求めて日用語(自然語)を利用するという戦術を採った。第四論稿において、再び漢字語を避け、日本語固有のことばを利用した。ここでは、「凝る」という鍵用語、および「こと」と「かた」を軸とする補助的用語系を試作した。本稿もその手法を継承する。

このように、ことばはこの一連の論稿における探求の対象である一方、探求における唯一の道具である。しかし、この「得られる解が方法を保証する」という循環自体が、探求すべき課題のひとつである。たとえば、ことばの機能について、ここまで「解」および「解く」といった語を用いてきたが、これまで、掘り下げた検討を加えていない。

この方法論上の課題が論稿の目的にも示唆を与える。ことばは凝りを引き起こすとともに「解き」(解くこと)に関係するため、解きに関する取り組みは、ひととことばの宇宙におけるひとの作用ないし関与を解くことにつながる。そこで本稿では、「解き」(解くこと)に照準を置きながら、ひととことばの宇宙の実相記述を進める。

## 2. 問

### 2.1 問の所在

前稿（第五論稿）でいう「宇宙観」、つまり種々の世界観を見るための世界観は、文字通りに複数の世界観を接合した世界観を想定したものではない。たとえば、さまざまな世界が断裂図法による世界地図のように平面に並列する像が視界に広がるわけではない。

世界はそれぞれ完結し、互いに相容れない（そもそも、それゆえに世界という語を用いてきた）。他の世界は、わかる時に至るまで、わからない。いずれ世界がかわり、ほかのことがわかることもあるかもしれないが、その時にはこの世界がわからなくなっており、ひとつの世界において他の世界を見ることはできない。

そればかりか、ひとはしばしば、かわることを妨げるようである。第四論稿では、その事態を「ひと（私、自我）が凝る」と呼ぶ語法を導入し、つづいて、凝りが特定のことばに対する固着であると措いた。世界がことばのみによって構成されるわけではないはずだが、個々の世界固有の特質（色）は、ことばの偏りと強く結びつくと考えられる。

ひとが随時「凝り」に陥る以上、その世界を信頼することはできず、「私は凝る（ことがある）」ということだけが確実な経験だと言えるが、「凝り」を意識化し、さらに凝りの原因と考えられる知識・思想・文化等（と呼んできた何か）を「ことばにすぎない」と断ずる（処断する）ことにより、世界の膠着を一定範囲で制御できるようになる。

次いで第五論稿では、凝りの反復によってことばの偏りが助長または保全されるという着想から、凝りによって形成・整形されることばの系がひとつの世界の基となるという解へと至った。第四論稿で得られた像は“種々のことばの散在する荒寥とした風景”（村主, 2014）であったが、この解からすれば、ことばは均一に分布しているものではない。混沌（第二論稿で探求した、ひとを取り巻くことばの総体）には「むら」や「だま」がある。

ひとは常に凝っているわけではないようだが、帯同することばの塊（固有の偏りがある）を世界の基盤とし、一定の傾向の下へと制約され、他の世界が遠くなる。しかし、凝りによって世界が偏りを帯びると認めるなら、むしろ（あるいは、まさに）そのことに拠って、別の構成の（偏りの向きの異なる）世界があると推定することができる。（いうならば、《我かく思うゆえに他あり》というところだろうか）

前稿の宇宙観は、こうして、「ひとの周囲をことばが取り巻く」という初期世界観を基に、凝りということばを用いることによって導出した解である。多分に展開の余地があると思われ、まず（ひとつの / 基盤となる）世界を超越する device を備えていない。他の諸世界は想定に過ぎないから、いわば辺境の惑星から大宇宙を遠望しているような像である。

次に、ひとを取り巻くことばの総体（第二論稿で混沌と呼んだ）が種々の（自他の）世界に分割されていることになるが、分断されるなら、そのままでは、「混沌」と形容しがたい。何か、諸世界の燦立を保全しながら混合させる媒質が介在しているのだろうか。ともあれ、このシャボン玉のように諸世界が浮遊する像の不快を解くために、ひととひとの間の探索が求められる。

### 2.2 解の糸口

ひとはことばの塊を帯同し、その塊の上に固有の世界が浮かぶ。そうした世界の集合がひとびとの宇宙を構成する。そうしてことばの偏りがひとつの世界を特徴づけるならば、その独特の傾きを帯びることばを見つけることがその世界を探るための足がかりとなることが期待される場所である。

ひとを取り巻くことばの中には、なじみのないことば・なれないことばが含まれることだろう。そのことに気づき、それら違和感を覚えることばを手がかりとして他の世界を思い描くことができそうだ。

そうした異質なことばは、違和感があるという以前に「身に覚えのない」ものなので、天空より飛来する隕

石のように（あるいは、見知らぬことばが小惑星帯のように寄り集った塊から岩塊がはじき出されて到来するように）思われる。

そう考えるなら、「ことの端」という日本語表現にこと寄せることもできて好都合かもしれないが、前稿（村主，2014）の解（「凝りはそのひとに帯同することばの塊に固有の偏りを与える」という旨）によれば、ことばはひとの「内側」に溜め込まれる。その解に基づけば、他のことばとは、単純に（氷床が時折割れて流氷をもたらすように）ひとの保持・帯同することばの切片を分け送るのではなく、その固有の傾きの反映である。つまり、「こちらから見える他のことば」は、他のひとの世界の持つ（こちらとは異質の）傾きの噴出口だと考えることができそうである。

ただ、それで他の世界がわかるということではない。仮に他の世界へと移転することができたとしても、その時には元の世界がわからなくなっているわけである。世界をこえることはできない。確かに、「この」世界をかえることはできる。ほかの世界があると確信することにより、特定のことばに固着しこの世界に囚われる危険を回避（少なくとも抑制）することができるのだが、それは、それら異質なことばを取り込むことによって「世界を広げる」ということにすぎない。

そもそも、基本的な問題として、他の世界のことばを明確に同定するのは容易でない。なじみのないことばは少なくない。明示的な対立や軋轢が認められるものだけでなく、耳の痛い・耳障りの悪いといった感触を覚えるものを数えるなら、異質なことばが周囲に氾濫しているようである。しかし違和感というのは決定的な基準ではなく、それ以上に、いずれも等しく、ことばである。

その異質なことばが世界をかえるなら、それは世界の形成要因としてはたらいっている。世界がかわらない場合には、その違和感ゆえにむしろ凝りをもたらすのではなからうか。そうでなければ、単に「わからないことば」であって、実質的にことばではない。ことばだと認めた時点で「私の」世界に引き入れてしまっており、その意味ですでに「私のことば」だと言えるだろう。

したがって、この「異質なことばの背後に他のひとが介在する」という推定は、砂礫の山の鳴動に驚き、中に何か怪物が潜んでいると思ひ描くような構図である。あるいは、砂礫の山がむくりと起き上がり歩き出すのを夢想するに等しい。それどころか、その砂山の怪物は、手を触れればさらさらと崩れ落ちる実体のない代物なのかもしれない。ことばの作用によって他の世界を想定し、ことばの助力によりことばを通してそれを捉えようとしている（ことばを武器にことばと取り組む）という方法の限界と言えようか。

しかしそもそもこの顛末は、この一連の論稿の世界観に起因する。意図的に独自の用語系を導入して特殊な世界観を構成し、それに依拠して「ひとびとの世界の集合が自分を取り巻いている」と仮定しているものである。まさにその点に、糸口がありそうだ。

### 2.3 アプローチ

世界は、明滅する。この一連の論稿の示す世界像は、そのことばに固着し、凝ってその偏りを許容している時に現れる像である。このテキストから離れれば、この意識もしばし途絶え、日常が視界を埋めるはずだ。すると、大小種々の凝りが訪れ忙殺されるだろうが、いずれいつしか気づき、再びことばが視界に散在する像を得ることができる。

このことに対し、第五論稿（村主，2014）では、“昼夜醒睡のリズムのように明滅する世界の、波のような交互運動の狭間、「表の」世界（日常）の停止している時間を縫いながら、さらに展解を進める”と覚悟した。しかし、この過程が凝りに関わることからすれば、ふたつの状態の一方が異常事態ということではなく、それぞれ交互に訪れる常態である。ならば、明滅はある種の周期的な自然である。

この一連の論稿に確信を置く間はことばの宇宙が遠望され、個々の世界は相対化されるが、ひとつの世界に没入する周期が訪れると、その世界の諸事に視界が埋められ、ことばの宇宙などという代物はまた見えなくなる。そもそも、ことばの宇宙という像もひとつの世界像なのだから、いずれの態も劣らず確かである（あるい

は優らずに不明瞭)と言えそうである。ならば、他の世界を探る工程において「ことばの宇宙」解に行き詰まった以上、その対局面となる「こと」の領域に打開を求めるのも悪くなさそうだ。

ただ、不用意に世界へと目を向ければ、ことばのもたらす種々の像が併せて襲い来るだろう。その中で見える他者は、既成のことばで捉えた「他人」の像である。ことばの傾きによる「色」が付いているというだけでなく、その像に連合することばが凝りを誘発するおそれがある。そこに目を向けずに(あるいはその像を透過して)他の世界を捉えるよう努める必要がある。

この一連の論稿を通じて追究してきた方法は、特有のことばに固着して世界観を観ずる世界観(宇宙観)を保持するという形であり、いわば戦術上の凝りを通じてことばの支配を踏み越えようとするものであった。世界の明滅を自在に往還することはできないにせよ、この一連の論稿のことばに留意を向けることにより、随時、ことばの支配を減衰できると期待される。

こうして、凝りに対する留意を保ってことばの作用を抑制しているうちに、振り返って世界に目を向けてみよう。すると、その時それらは平素なじんでいる「事物」としての色を失い、ひとがシャワーの降り注ぐような具合におびたしい「こと」にさらされていると見とめられるようになる。

ことは、各々ながしかの違和感を与える。その違和感はことばと同様この世界の変化を促すが、その際に覚える違和感は、ことばの内に含まれる「異質なことば」とはまた異なる感触、ある種の「あらし」がある。それゆえその傾きは、世界を能く変えるだけでなく、見知らぬ他の世界に関する示唆を多く強く与えるのではなかろうか。

ことの領域と向き合って「我を失っている」時間をことばの宇宙を探る好機ととらえ、しかし慎重に、ひととひとの間に関して考究しよう。

### 3. 身

#### 3.1 かわる・ことなる

「こと」という語は第四論稿において、ひとの「凝り」とその対処を検討する際に導入した。ことばに対する固着が凝りにつながると見て、ことばから目を離れた時に見える(そして、ひとに対しことばと同様に作用する)何かを推定して措いた解である。

ことにおいては、しばしば繰り返しが見とめられる。ひとがことの繰り返しを見とめると、「かた」が形成される。かたにも繰り返しも見られ、かたの繰り返しを見とめると「かたのかた」が構成される。かたのかたは、ことと同様に(あるいはより容易に)かたを形成・整形する。ことばとは、この「かたのかた」と見てよさそうだ。

第五論稿ではその延長で、ことばの「かたより」「かたむき」「かたまり」に言及した。このように、第四論稿・第五論稿はいずれも、主としてことば(かたのかた)との関係に照らして展解した。そこを転じ、今度は「こと」に焦点を当てて解きすすめよう。

ことという語の導入の背景は、第三論稿に遡る。第三論稿では、「わかるまでわからない」、つまり、何かがある前とわかった後の断絶(乖離)に着目した。

この「わかる」ことと対称となるのは「かわる」ことであろう。基本的には、かわれば、わかる。しかし、かわらなくてもわかるということがある(ずれがある)し、かわったのにわからないということもある(凝り)から、かわることとわかることの二者は連動しながらも個々自律するようである。「わかる」という作用には、ことばが深く関与するようである。それに対し、「かわる」の側がことの領分なのかもしれない。それならば、「何かがかわった」と見とめた時に「こと」が認められるということだと言えそうである。それらがそれぞれ何か、わからないが、「ほかの何かではない何か」から「そうではない何か」へとかわったことは確かである。

さて、こうして慎重に考えを巡らせているあいだも、個々のことを見とめればそれぞれにことばが応えるか

ら、ややもすると、そのことばにとらわれ夢中となってしまう。しかし逆に、それが手がかりかもしれない。

ことが、それぞれにことばを誘発するということは、そこに偏りが見られるわけである。そのことが起こる以前（かわる前）には別のことが起きているわけだから、そのときにも何らかの偏りが見とめられるはずである。つまり、ある偏りから別の偏りへと遷移ないし移行したことになるから、偏りの遷移が「こと」の実相なのだろう。

他方、特定の（または一群の）ことばが誘発されることからすると、ひとつの偏りから別の偏りへと移行を促すか、移行の方向を規定する特性、ある種の傾きが介在していると見られる。

以上から、「種々の偏りがモザイク状に連なったそのそこかしこに織り込まれた傾きの働きによって構成が万華鏡のように変化する」という像が得られる。そのような偏りの構成がことの源母（原因集合）であり、それが天幕のようにひとの世界の外殻をなすと考えられる。

### 3.2 かたちと界面

こうして、「こと」ならびに「かわる」ことから遡及して、ことに関する基本的な要因は偏りと傾きであるという解が得られた。

偏りが基本因子なら、天幕のようだとしても、ドーム天井のような平板なスクリーンというわけではなからう。しばしばことにおいて繰り返しが見とめられることからすれば、さぎ波のような偏りが一面に分布し、そこかしこが随時変化するというような乱雑ではなからうし、全体が常ならず変わり続けるような（生々流転と呼ぶべき）状とも考えられない。偏りの構成にむら（まとまり）があると見られる。

この「繰り返し」とは、こと・かた解を構成する工程で、ことの作用に関する記述の端緒として導入したことばである。既成の語を用いるなら、種別を見出すことができるかもしれない。まず、反復と持続とに分けることができそうだ。いくつかの繰り返しが複合して循環を構成することもあるだろう。いずれにしても、ことの繰り返しが見とめられればかたがつかれるから、そうした偏りのむら（まとまり）を「かた」との対称において「かたち」と名づけておこうか。

かたち（偏りの集積）においては、種々の傾きが複合してまとまり、秩序とは言えないまでも、ある種の均衡を得てまとまった傾き（形勢とでも表すことができそうな）を帯びると考えられる。かたちとは、偏りのまとまりであるとともに、まとまった（大きな）傾きの織り込まれた一体だと解くことができる。

傾きはことの繰り返しの様態に現れ、大きな傾きが繰り返しの増大につながるかもしれない。高い頻度で特定のことの繰り返しが見とめられると（かたの繰り返しの経て）容易にかたのかた（ことば）が形成されると考えられる。あるいは「強い」傾きであれば、頻度が低くともことばの形成が促進されるかもしれないが、ひとまず相対的に、「みなれぬ」ことと「なじみの」ことが次第に分けられるという予測をもとに、先へと進もう。

中でも、ひとに帯同しているかのような、顕著に頻度の高い「なじみ」が見られる。特定のことの一群がおおむね常に天幕（ことの構成全体）の一角を占めるように繰り返されるのである。

それは、相対的に安定した傾きを見せている。おびただしいことがまとまって見とめられるために特定したわけであり、変化の集中帯であるはずだが、流動するのではなく、大局において一体性および一貫性を保った上で小刻みな変動を示しているようだ。その背後に相応に大きなかたち（偏りのまとまり）が介在しているにちがいない。

一方、それ以外の「なじみ」ならびに「みなれぬ」ことについては、自在に多様なことが見られるわけではなく、「視野」ないし「視角」を制約ないし制御されている様子である。

ここで想起されるのは、ひとはわかるまでわからないという以前に、目覚めるまでは目覚められない（村主、2012）という点である。目覚めたのちにそのことを覚えて愕然とするような、抗しがたい根源的な制約であるから、ひとはその制約を背に（制約の限りで）考え進めるしかないのだが、その制約がひとに帯同する「大き

なかたち」に起因するのかもしれない。そうであれば、ひとがそれを携えるという意味で帯同するのではなく、ひとはそれに付随ないし依存していると言えそうだ。

そのような「それ」は、日常において「身体」と呼んでいる対象に当たるのだろうか。そうであれば、好都合ではある。身体ないし肉体については、多くのことばが用意されており、多くのことを理解できるからである。

しかしここでは、「身体の再発見」を企図して（それにしてはいささか面倒な）作業に取り組んだわけではない。ひととことに関する解の手がかりを慎重に探っている。不用意に既成のことばを当てて答えを得ようとすれば、遠い客体として正態が持ち越されるという懸念がある。仮に「それ」が身体と比定できるとしても、概念の再調整（それとおそらく拡張）が不可欠である。そこで、生活において最優先されるべき健康や、純粹精神に対する重荷・懸念材料としての肉慾・獣性に想いを馳せることなく、こうして輪郭を獲得しつつある概念を保全するとともに展解の余地を確保するため、包括的に「身」と呼んでおこう。

身は、それ自体がいくつものかたちの合成体のようである。そのため「内部」由来の（身を構成する小さなかたちの相互運動によって生ずる）変動も多いのだろう。一方、まとまりを保っているがゆえに、他のかたちとの干渉によって変動（こと）が生ずるようだ。接触に伴って双方が変形などの影響を被るような「事件」のみならず、接近によって生ずる違和感が想定される。後者の一環で、かたちの変動を伴わないことを考慮することができる。たとえば、回り込んで眺めれば、静物であっても、ことを生ずる。

こうして、ことはおしなべて、身の関与のもとで供給されると見ることができる。偏りの変動・変異すべてがことをなすわけではなく、身に響いてはじめて、こととして見とめられると考えられる。つまり、身は変動を検知する機構ないしそのための水準器、というところか。いずれにしても、身の内外の種々のかたちの波及の総和が「天幕」のようにひとの眼前に広がるのだろう。

ことがみな身の関与のもとで生ずるとなると、むしろ、ことの生ずる領域が身だと定義する方が有効かもしれない。そう捉えるならば、身はひとの世界の界面である。そしてさらに、身が他の世界との接触面だという期待も得られる。

さて、前稿（村主，2014）では、特定のことばがひとに帯同することから、ことばに偏りと傾きが見られると見出した。以上と合わせると、ことばの局面においてもことの局面においても、偏りと傾きが世界に関する確実かつ基本的な要因だということになる。それとともに、身の概念の成型を通じ、ひとひとりの世界を超えた領域に関する解を求める基盤が得られた。

これらを踏まえ、あらためて、ひととことばに関する解を掘り下げることにしよう。身を認めたことによって、何がわかるだろうか。

## 4. 報と情

### 4.1 むくい

身の概念を用いると、ことは異質な偏りが身にさわって生ずる違和感（あるいは、身の変化）であると記述することができる。偏りにはむら（かたち）があり、ことの繰り返しが生じ、そしてそれを認めた時に「かた」が生ずる。すると、かたは身の受けた影響の痕であるものということになる。あるいは、かたは身から得られるかたちの影像と言えそうだが、ともあれ、かたの形成に伴い、しばし世界の展開が止まる。「凝り」と似ているが、ことばではなくことの影響である点が異なる。

ある時はすぐまた展開するようになって、新たなかたちが次つぎに認められるようになるが、持続の後におもむろに動きを見せる場合もある。いずれにせよ、かたの遷移の停止状態が解消される際に、何かの波及が認められる。それは、ことばの領域から波及しているようで、しばしばそこにも一定の繰り返しが見られ、「かたのかた」がかたに呼応していると見てよさそうだ。この、かたに対してかたのかた（ことば）が返ってことと

引き合わされる工程が「解く」過程ではなからうか。

それは「ひとが解く」という主体的な工程かどうかはわからないが、ひとまず、呼応が繰り返されるうちに返ることばがことと合えば、かたが解ける（像を止めた状態が解消される）。かたは強い偏りであり、ある種の緊張状態と言えるから、そのかたちに合うことばが見つかる、違和感（異状）に対して留意するという責任をそのことばへと託し、かたを解いて安堵すると記述できようか。

ことに合うかたのかたが呼応すれば、そのかたのかたの繰り返し頻度が累加され強化されることだろう。たがわず符合するとも考えにくいから、その際にかたのかたが調整されるだろう。一方、呼応する（あるいはことと合う）かたのかたがない場合も少なくないが、それはそれで、別の事情で停止状態が解かれるようだ。符合するかたのかたが返らないから、わかったというわけではない。しかし、ひとまずかたの痕を止めておくことによって収まりが得られて停止から復帰し、そこでまた他のかたちへとかたが向くようである。繰り返しが頻繁であるか違和感の度合いが強いとなかなか解かれまいが、それはそれで、かた痕の強さという形で刻印されているのだろう。いずれにしても、ことの繰り返しによってかた痕が繰り返し穿たれ（その際にいくぶん調整され）、やがてまとまった形を認めることができるようになると、かたのかたとして機能することになる。

かたのかたとは、身において認められる偏りの変化・遷移ないしゆらぎが「解く」工程を経て波及して生ずると記述できる。こと（変化、ある偏りから別の偏りに「なる」こと）に対応することから、かたのかたの基本単位（かたあと）はひと組の偏りから成るのかもしれない。さらにそこに相互のつながり（片方の偏りから別の偏りへと移る道筋）が実装されると、「かわる」「ことなる」という過程（偏りの遷移）をことばの領域における偏りと傾きによってかたどることができる。

一方、身はこと（異変）を検知するセンサーに留まらないようだ。身もかたちのひとつだから、他のかたちと交接し、傾きが波及することになる。つまり、身は他を「変える」のだが、その際、かたが身へと影響を与えているようだ。そのことは、しばしば身がかたの傾きと呼応する（応えがかえる）ために確認できる。かたもひとつのかたちであり、その傾きが身に波及するということか。ともあれ、身は（いつもではないようだが）それに応えて動き、そして身を通じて他のかたちへとかた（意向、意思）が反映されるとまとめられる。ひとのことばはかたと同様にひとの身にくるまれ、かたよりもさらに内陣に介在していると考えられるが、このようなかたの働きを通じ、身から外（他のかたち）へと波及する。

こうして、ひと（かた、および帯同することば）が身を貫いて（あるいは身を媒介に）他のひとびとと交接するという像が得られた。一貫して見られるのは、返し、返されるという連関である。あるかたちから別のかたちへとピンボール・ゲームのように傾きが波及し、それによって偏りが変わり、その変化は新たな傾きの波及により確認される。この像は、枢要部分において漢語「報」に託された像に通ずると見受けられる。

## 4.2 目

身はまわりの傾きをとらえる媒介であるとともに、ひとの傾きを波及させる機構でもあるという解が得られた。かたが身を通して波及を受けまた波及を与えらるとなると、まわりから見れば身がひとの姿なのだろう。そしてそのことから、ひとの身に触れてことを起こすさまざまなかたちが誰か他のひとの身であると容易に推定される。

しかし実のところ、ことの媒介となる一群のかたちは、範囲が時によって変動しているようである。つまり、帯同するかたちのどこからどこまでが「わが身」か、よくわからない。まして、他はことの生起の偏りから推定している。多彩な傾きが認められ、伸縮・変幻自在であるかのようにも思われる。あるいはむしろ、たたみかけるようかわるがわる押し寄せることから、複数のかたちが交錯している（折り重なっている、互いに範囲が重なる）という節もある。

そうなる、身体と呼びかえることがさらに難しいだけでなく、それらをおしなべて「ひとの身」と呼ぶの



も躊躇するところだから、「もの」とでも呼ぶべきか。しかし、こちらの身との相関で（そして、かたの様態次第で）範囲が異なることからしても適当ではない。ひととひとの間を取り持つという位置付けから、medium/media という語を当てるのも悪くないが、最広義で用いるという前提を保たないと概念を損ないかねないので、あまり得策ではない。遡れば、「ひと」も紛らわしいわけで、法的人格や擬人化された存在を包含させるなどの操作が有効かと思われる。いずれ「ことば」および「こと・かた」をまじえて全体的に再検討する必要があるのだろうが、せつかく慎重に運んでいるのだから、ここは「まとまった傾き源を帯びるかたち」という点を再確認した上で、懸念を残しつつも語法を維持する。

さて、そうした具合に、多様なかたち／身（あるいはその内包するひと）が混在・交錯するとすると、しばしばぶつかり合い、押しのけ合うことだろう。時に、食い合うかもしれない。「報いの応酬」が繰り返されることと解する限りは、混乱の果ての乱雑さへと至るのだろうが、少なくとも身の届く範囲には相応の均衡が見られるようだ。単に「なるようになる」のかもしれないが、そもそも「返り、返す」「返し、返る」という報いの過程には、波及をいったん受けとめる機構が介在すると考えられる。

まず、報いが連鎖するということは、いくつものことが引き続いて生起するということである。「かたち」を認められるほどにこの生起が繰り返されるのは「おおごと」であるが、かたのかたが揃えば、ことを容易に捉えられるから、ことをまとめて捉える（この連鎖・連関や複合的なことを認める）こともできるだろう。

かたのかたの間につながりが生成されると、かたとの応対が替わって、代わりのことばが返るようになることもありそうである。とくに、推移（因果関係、成り行き・成り立ち）や、関与するかたち（様相、「なり」）をとらえることができれば、かたに対する（そしてことに合う）応えの選択肢も豊富になり、解く工程に寄与する。その延長で、同一性・帰属や属性・性質の把握ができそうである。また、次に生起することを予期し、それにもとづいて身を動かして返すこともできるのではなからうか。ことに合わない傾きを返すことによって認めた事態を変えるなら、それもことに対する応えであり、「解く」ことの一種だと言えそうである。（「なる」との類比で言うなら、「なす」というところか）

この一連の過程は、ことに対する「慣れ」の問題と記述することができる。かたのかたを形成することにより、頻度の高い（あるいは強度の高い）ことに慣れるとともに、合わぬ（慣れない）ことに対して身を動かして操作する（ならす）ことができる。それを繰り返せば、近接したかたちとの折り合いを確保することになる。

血縁、つまりヒトなどの鳥獣における発生ないし遺伝上のつながりのほか、交接の持続や頻度（なじみ）が折り合いの促進要因になると推察するのは容易である。それらに準じ、種々の共通事項や類似もポジティブにはたらくだろうし、逆に、補完できる組み合わせという場合もあるかもしれない。しかしいずれにせよ、それらのつながり自体は決定的要因とは考えられない。根柢でそれらを有効にするためにはたらく基本要因はごく単純で、なじもうとする（つながりを認めようとする）傾きではなからうか。そうした傾きは漢語「情」に託されている観念に関連すると見受けられる。

そうしたつながりはあらゆる局面で少しずつでも見つけられるだろう。極論すれば、何らかの関連でよいのなら、あらゆるかたちにおいてつながりを認めることができる。すべてのかたちを適切に組み合わせてその傾きを充足するのは不可能だが、局所においてその都度折り合いを図ることにより、「血の通った情景」がひとの眼前に広がるはずである。

そのためには、身を通して他のひとを見ることだ。ことばに染められた目で「身体」を見るのではなく、その身に内包されるひとの傾きを捉え、それに逆らわず、なおかつ自らの傾きを損なわず、折り合いを図るのだ。このことは、「人体」に限るべきでもない。あらゆるかたちの帯びる傾きを認めなじむことにより、「おおごと」を回避し、身を保全することができる。このとき、他のひと（かたちとその傾き）へと向けられる眼ざしこそが、情の発現形なのだろう。

このような経緯から、常に情を行使することはできないということもわかる。したがって、ひとの間の種々のかたちの織り成す全体は、「報」のせめぎ合いと「情」による折り合いの混在する様を示すと解される。

## 5. まとめ

ひとの世界の界面は天幕のように思われたが、どうやら曲平面に描かれた絵面ではなく、多くのかたちに分けて捉えることができる。そして、視界に現れる「こと」は、ひとの帯同するかたち（身）が他のかたちと交接して生ずる身の異変（違和感）である。

ひとは、帯同することばと身にはさまれている。ことを解き継ぐ過程では、ことばとひとと身の間で返す・返されるという呼応が繰り返される。そのうち、ひとは固有の傾きを帯び、その傾きは身を通して他のかたちに波及する。ひとびとは互いに折り合いをつけようと努めるが、その波及は局所に留まる。そのため、種々のかたちの構成する全体は、それぞれの帯びる傾きの折り重なる干渉縞（モアレ）であり、おのおのかたち（ひととその身）の運動によって、時々模様（綾）を変えると記述できる。

身の傾きは、それぞれのことばの傾きを（かたを通して）反映する。しかし、すべてがことば（およびかた）に基づくとは（「わが身」に照らしても）考えにくい。また、ことばにおいては、矛盾律が認められる。しかし、ひととひとの間の領域において、相互干渉（かたちの衝突・変形）は生じても、相剋は生じない。第三論稿（村主, 2012）で観測したように、ひとの世界はそのひとにとって絶対であるが、その特質はことばとともに身の内に封じられ、かつ保全されている。これらのことから、矛盾を伴う相互関係が相対的な関係へと変換される領域が身であると記述することができる。

ひとびとは、身で接しながらも、交わらない。慣れ・なじみは個々のひとのことばの領域に織り込まれ、そして蓄えられる。しかしことばは身によって隔絶されるため、ことばの領域における矛盾が保全される。

本稿では、ひとびとがそれぞれ固有のことばを抱えながら、身を介し「情」を行使することによって、一定範囲で折り合っているという像を得た。しかしひとびとの宇宙は、塔の破却を目前にしたバベルの街ではないようである。その点を解くために、あらためて（最終的に）ことばと向き合うことが望まれる。

memoria

ものごとのもとをさぐる道行きを照らして去った兄の後ろ姿に。

## 文献

- 村主朋英 (2010). 情報学の中核にあるもの：根源からの再出発を企図して. 愛知淑徳大学論集 文学部・文学研究科篇, 35, 123-134.
- 村主朋英 (2011). 情報の時空：われわれをとりまくもの. 愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇, 1, 31-44.
- 村主朋英 (2012). 情報と矛盾：世界の構成. 愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇, 2, 63-71.
- 村主朋英 (2013). こと・かた・ことば：情報の発生と伝達によせて. 愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇, 3, 43-48.
- 村主朋英 (2014). 凝りと澱の地から：情報の蓄積・組織化をめぐる. 愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇, 4, 37-46.